390
一
28

傳道叢書
第五編

灌頂講話

始

傳道叢書第五編

灌頂講話

390-28

灌頂講話目次

第一章　序　言……（一）
第二章　起　原……（四）
第三章　名　稱……（七）
第四章　種　類……（八）
第一節　二種說……（八）
第二節　三種說……（一〇）
第三節　四種說……（一四）
第四節　五種說……（一四）
第五節　各說の分類……（一六）
第五章　七日作壇……（一八）

大正
9.4.28
內交

第六章　阿闍梨と弟子……（二〇）
第一節　阿闍梨……（二〇）
第二節　弟子……（二二）
第七章　金胎前後……（二四）
第八章　三摩耶戒……（二六）
第九章　灌頂作法……（二八）
第十章　授與物……（三一）
第一節　印信……（三一）
第二節　投花……（三二）
第三節　金剛誓水……（三四）
第四節　金剛線……（三五）
第五節　齒木……（三六）
第十一章　結緣灌頂作法……（三八）
第一節　廣式　受明灌頂作法……（三八）
第二節　略式　結緣灌頂作法……（三二）
第十二章　灌頂の功德……（四三）

以上

灌頂講話

大傳法院流　人法四十九代　伽藍法五十代　法孫　富田戮純

第一章　序言

灌頂と云ふことは我眞言密敎の生命の宿る所であるから、大切の上にも大切にし研究の上にも研究せねばならぬことである、然るに古來灌頂は事相であるから研究すべきものでない相傳すべきものであるとの考から、單に尊いもの難有いものとして之を相傳し來つたので、灌頂の理論と云ふやうなことは餘り研究せられて居らない、正慶元年に脫稿した仁和寺眞乘院弘融師の著銑遮祕要鈔八卷、建武四年に出來た高野山榮海師の著儼避囉鈔十一卷位が研究的のものであつて、其他に六卷手鏡とか傳流小作法とか灌頂糸玉二十五冊等の著はあるが、實地修行の便に編輯したものが多い拙僧は何

時も研究と實驗とは相待つて始めて完全なるものであるとの主張から、常に事相の根本研究を主張して居るものである、如何に眞言密敎が實修實行を尊ぶとは云へ、理論を顧みぬ譯には行かぬ、常に三代敎相を知らぬ事相の阿闍梨が續くと事相は邪道に陷ると云ふが、夫は事實である、故に拙僧は此度我豐山派の宗務所から「灌頂の講傳」と云ふことを依頼されたが、矢張是も古來の所謂講傳風でなく、全く講話に致した次第である、若し自ら灌頂を御實行になる御方があつたならば、夫は別に「三卷式」の讀渡し等を致しても差支ないのである。

さて灌頂は一宗の最大儀式である、故に此最大儀式を行ふと云ふことは、吾々密敎の僧侶としては實に光榮此上もないことであつて、是が信仰の結晶體である、故に灌頂の行ひると否とに依つて此宗敎の信仰が冷却して居るか熱烈であるかが想像せらるゝのである、然るに世が末世となつて、此灌頂を一の形式的儀式のやうに心得、受くる人も、授くる人も何の感しもなく何の信仰もなく、只單に古の形式を相續して居るものがある、此徒輩は單に形式のみを重し……就中外形の形式……其內面的の信仰の如きに至つては更に顧慮して居らない實に法の爲め痛恨に堪えぬのである、或人は末世だからせめて形式丈でも相傳すれば功德があると云ふ、夫も一理ではあるが形式的に灌頂を取扱ふの結果、灌頂をして實に輕いものゝやうに思はしむる傾きがある、今の人の受くる灌頂に敎師になる資格を得る爲めに、信仰の有無に拘らずいや應なしに灌頂を授けて居る、こんな譯だから拙僧の如きも兩三度灌頂の大阿闍梨を勤めて居るが、其傳法の受者で拙僧の所へ年始狀を毎年送つて居る人は三五人に過ぎない、一宗の最極の大事を相傳した傳法灌頂を、恐く宗敎所へ記錄を納めて貰ふ「敎師」の辭令位にすら思つて居らぬのであらう。

第二章　起原

灌頂は何時始つたかと云へば、祕密曼荼羅教付法傳に

第二祖嚩曰囉二合薩怛嚩二合摩阿薩怛嚩二合(金剛薩埵)、親對法身如來海會受灌頂職位

とあつて、我眞言密敎の第二祖たる金剛薩埵は法身大日如來から此灌頂の儀式に依りて第二祖たる資格を得たのである、故に其の後此の灌頂の儀式に依て眞言密敎を嫡々相承し來つたのである、拙僧の如きも報恩院流、中性院流、慈猛流等を相傳して居るが、大傳法院流は雷斧大闍梨耶より相傳したのが四十九代、快亮大僧正より相傳したのが五十代である、而して雷斧大阿闍梨より相傳したのを人法として尊び、快亮大僧正より相傳したのを寶仙寺の伽藍法として相續して居る、即ち灌頂と云ふことは法身大日如來から始つて、今日に至るまで顏々相對し一滴の水も洩さず、瀉瓶相承して居るのである、斯樣な譯であるから眞言宗の立場から云へば此灌頂なるものは法身如來と共に無始以來存在して居つたのである、併し乍ら此最も高遠なる理想が事實となつて顯れ來つた時は何日であるか、同じ付法傳に依れば即ち付法の第三祖龍猛菩薩の時からである、其文には

第三祖者、釋迦如來掩化之後八百年中有一大士、名那伽閼剌樹那菩提薩埵(龍猛菩薩)……入南天鐵塔中、親授金剛薩薩灌頂、誦持此秘密最上漫荼羅敎、流傳人間

とある、此人間に流傳せられたのは、即ち大聖釋尊滅後八百年の後である、龍猛菩薩が南天鐵塔を開いた年は明確に何年であると云へ得ないが、大凡今より壹千八百年以前と見て差支ない、然れば我眞言密敎の灌頂なるものは、吾々の意識し得たのは其時からである。

扨てそこで問題となるのは、此灌頂と云ふことは其前に事實として世界に存在しな

かつたのであるかと云ふと、さうではない、壹千八百年以前にも矢張灌頂は存在したのである、併し其以前に存在した灌頂なるものは、眞言密敎を相承するが爲めに存在したのでなくつて、印度國王が即位の大禮として此灌頂を行つたのである、大日經疏に依れば

譬如世間刹利之種(王族)、謂欲紹其繼嗣令王種不斷故、爲其嫡子而作灌頂、取四大海水、以四寶瓶盛之、種々嚴飾、又嚴飾子(太子)身、衆物咸備、又飾大象、於象背上持瓶、令太子座於壇中、所統畢集、於象牙上、水令流注太子之頂、灌此水已、大聲三唱、汝等當知、太子已受位竟、自今以後、所有敎勅皆當奉行、今如來法王、亦復如是、爲令佛種不斷故、爲順世法故、有此方便印持之法、縱此以後、一切皇衆咸所敬仰、亦知是人畢竟不退於無上菩提、定紹法王之位、諸有所作眞言身印瑜伽等業、皆不敢違越也

とある、然れば元來灌頂の儀式なるものは、印度國の國王即位禮であつたのを我眞言密敎が、世間相常住、當相即道の意味で之を採用して、眞言密敎の師資相續の儀式としたのである。

第三章　名稱

灌頂とは平たく云へば、受者の頭頂に五智の瓶水を灌くと云ふことであるが、不空三藏の說が其表制集に出して居るのに依れば

頂謂頭頂、表大行之尊高、灌謂灌持、明諸佛之護念、超昇出離、何莫由斯、

とある、此解釋は灌頂の二字を理想的に解釋したのである、秘藏記にも同じ意味の事が出て居る。

灌頂義、灌者諸佛大悲、頂者上之義、菩薩初地乃至等覺、究竟遷妙覺時、諸佛以大悲水灌頂、即自行圓滿得證佛果、是頂也

とある、此解釋も理想的である、而して此秘藏記の說に等覺から妙覺に登る位の所に灌頂せしむることを說いたのである、是は顯敎の楞伽經や華嚴經に說く所である、然れば秘藏記の解釋は純密敎の思想ではなく、密敎灌頂を顯敎に寄齊して說いたと見る方が寧ろ妥當である。

第四章　種　類

灌頂には種々の分ち方がある、事實的灌頂とすれば是等を或方法に依て分類し得ぬでもないが、理想的灌頂とすれば分類をすることが頗る困難である、是から各種の說を紹介しやう。

第一節　二種說

第一は弘法大師が惠果阿闍梨から傳授せられた

學法灌頂　　傳法阿闍梨灌頂

の二種類の分類である、御請來目錄に依れば

六月上旬、入學法灌頂壇、是日臨大悲胎藏大曼陀羅、依法拋花、偶然着中臺毗盧遮那如來身上……七月上旬、更臨金剛界大曼茶羅、重受五部灌頂、亦拋得毘盧遮那……八月上旬、亦受傳法阿闍梨之灌頂

とある、然れば弘法大師は受明灌頂は兩部各別に受けられて、傳法灌頂は兩部一雙に御受けになつたのである、

次は承和十年に弘法大師の嫡資たる實惠僧都(道興大師)が東寺に行はれた結緣灌頂、の奏狀である、其中には

結緣灌頂　　傳法灌頂

の二種であつてある、其文を引證すれば

於灌頂有傳法結緣二種、謂結緣者、隨時競進者皆授之、謂傳法者、簡入待器許之

とある、而して弘法大師の受法せられた學法灌頂と、實惠僧都が東寺に行はれた結緣灌頂とは、其内容が全然一致のものではないが、要するに弘法大師の受けた學法灌頂と、實惠僧都の云ふ所の結緣灌頂とは、一は在家一は出家と云ふ別があるから、受けて後の修行の致し方は違つて居るが、其受法する時の作法は大體同じと見て差支ない。

尙此外に

理趣釋には、持明、傳受印可の二種

略出經には、隨部法(別)阿闍梨(總)の二種を說いて居る。

第二節　三種說

灌頂を三種に分つ說には種々ある、普通の說には

結緣灌頂。　受明灌頂。　傳法灌頂。

の三種として居るが、此說は前の結緣灌頂を廣式と略式とに分ちて、其廣式なるものを結緣灌頂と名つけ、其略式なるものを受明灌頂と名けたのである、而して大日經には此傳法灌頂を

離作業灌頂(印法灌頂)。　事業灌頂。　以心灌頂。

の三種として居る、其說には

灌頂有三種　佛子至心聽　若秘印方便　則離於作業
是名初勝法　如來所灌頂　所謂第二者　令起作衆事
第三以心授　悉離於時方　令尊歡喜故　如所說應作
現前佛灌頂　是則最殊勝

とある大日經疏に之を釋してあるが、先第一の印法灌頂の所から行かう。

灌頂有三種、一者、但以印法作之、離諸作業、此是入秘密漫荼羅、謂有弟子、誠心愍重、深樂眞言行志求大乘、然資力乏少、若令一一具求衆事、反當於道有礙、是如

之人、師當深起慈心、觀彼心行、而攝引之、然值得爲此人、而作之、不得多爲之作、何以故、恐彼資力能辦者、生怠慢心、而不盡心損衆德本、所

とある、卽ち秘密灌頂を受けたいが貧乏で支具を具備することの出來ぬものは、印を結んで道具の代用をせしむるのである、是が離作業灌頂卽ち印法灌頂である、第二の具支灌頂と云ふのは又は事業灌頂ともいふ、七日作壇の作法に依りて造壇等總ての支分を具備して行ふ灌頂なる故に名けたものである。其說には

二者、以作事業而灌頂者、卽是師及弟子、皆先作事業也、謂先令弟子七日以來誠心禮悔之類、師亦於七日以來、爲其持誦秘求感應、及令辨諸供養物香花之類、緣壇所須一一令作、然此之灌頂與前者不殊、但以有資力故、令盡其所有、於諸佛海會之中、而作無盡供養

とある、卽ち印法灌頂と具支灌頂とは富めるものは廣式を行ひ、貧しきものは略式を行ふと云ふまでで、其功德には別に變りはないのである、第三は以心灌頂である、

三者、但以心而作灌頂、如是灌頂、不擇時不擇方、謂向東設位、或向南等皆得……師弟子俱得瑜伽、以心灌頂、猶如摩頂受記也……其灌頂法也、瑜伽阿闍梨、先入淨室而住三昧、如前所說、以身四分作四重漫荼羅位、亦如毘盧遮那所現之方位、一一無異也、如是作已、以秘密加持故、令彼弟子先在外而得、令者、自然而得金剛手威神加持引之、令入、亦自然而解作印等、一一如法、既入室已、以金剛手所加持所觀漫荼羅諸尊之位宛然現前、一一本尊等形及印字等、亦悉明了云々

とある　此灌頂は阿闍梨の身體に四重圓壇の漫荼羅を配するのであるから、全く秘密壇の灌頂であつて、今日行ふ瑜祇灌頂は夫に當るのである、此外に秘藏記には

摩頂灌頂　授記灌頂　放光灌頂

の三種を說ひて居るが、是は灌頂の功德から云ふたに過ぎぬので作法の上には關しないのであるから、嚴格なる意味の分類とはならぬのである。

第三節　四種說

古來略出經の

智印灌頂　名號灌頂　寶冠灌頂　繒綵灌頂

と及び、瞿醯經の

除難灌頂　成就灌頂　增益灌頂　阿闍梨灌頂

とを四種灌頂の分類とすれども、是等は單に灌頂壇の莊嚴の樣式に止るものにして、灌頂の種類として之を記する程にはあらざるなり。

第四節　五種說及其他

金剛頂義決には

光明灌頂　甘露灌頂　種子灌頂　智印灌頂　勿義灌頂

を明し、仁王經陀羅尼釋には

寶冠灌頂　印契灌頂　水灌頂　光明灌頂　名號灌頂

の五種を說けり、此等の意味は單に灌頂を一種の功德相として見居るに過ぎざれば此分類法に依らば自ら幾種の灌頂をも生じ得べし、以上は銑遮秘要鈔等に列擧せられたる灌頂の種類に就て記載したるに過ぎざるが、此の如き種類のものを擧ぐれば尙幾十種あるべく、此理に依て推論すれば、佛部、蓮華部、金剛部の三部には三種灌頂あるべく、息災、增益、敬愛、調伏の四種法には四種灌頂法あるべく、佛部、蓮華部、金剛部、寶部、羯磨部の五部法には五種灌頂あるべく、此五部には各四種法の附隨するものなれば、之を通計すれば二十種の灌頂となるべく、尙此意味を擴充すれば五部に各五部あれば二十五種となるべく、又投花得佛に依りて灌頂は自ら異るものあれば、此意味にて分たば胎藏界漫荼羅のみにても二百餘種の灌頂となるべく、而して諸尊漫荼羅にも自ら灌頂法の附隨し得るものなれば、此等を數へ來らば無量無數の灌頂となる

のである。

第五節　各說の分類

如上の如く灌頂には幾多の種類あるを以て、廉分七種、細分十三種とする說が行はれて居る、之を圖示すれば

七種說

一　結緣　結緣　大日經
二　息災　息災　大日經
三　受明　增益　曼荼羅經
　　降伏
　　受明　大日經
　　佛部

十三種說

四　阿闍梨　蓮華部　曼荼羅經
　　金剛部
五　傳法　印法
　　以事業　大日經
六　自作　自心
七　本尊　本作　大日經疏
　　本尊　蘇悉地經

となるのである、是は更に各說を綜合したのに過ぎぬので事業灌頂には關係がないそこで現在事業灌頂として行はれつゝある灌頂を分類すれば左の如くなるのである。

二種說　三種說　五種說

名稱　結緣　略式　廣式　結緣　受明　結緣　受明

傳法
- 傳法
  - 略式
    - 印法
    - 有相
  - 廣式
    - 事業
    - 有相
  - 秘密式
    - 以心
    - 有相

此外事業を離れたる無相甚深の秘密の灌頂に至つては今の所説でない。

第五章　七日作壇

灌頂を修行するに今日は水壇で行ふのであるが、印度の古法なるものは土壇を七日間費して築き、灌頂終れば之を破壇したものである。此事は大日經等に説いてある。今七日作壇の順序を記すれば

- 一自身加持　阿闍梨自身を加持して清淨ならしむ
- 二驚發地神　壇を築く爲めに地神より地を貰ひ受く
- 第一日
  - 三護地　大地を結界す今の地結印之に當る
  - 四堀地一肘　地を堀る事一肘して骨又石等を除く
  - 五塗壇　牛糞を以て壇を塗る
- 第二日　埋寶　五寶並に粥等を埋て地鎭をなす
- 第三日
  - 一置瓶　二十四瓶等を布列す
  - 二定方法　諸尊の方位を定む
- 第四日
  - 一灑淨　灑水をして壇上を淨む
  - 二白壇漫荼羅　九會の漫荼羅を塗る
  - 三請白阿梨沙竭　阿梨沙竭を誦して讃稱す
- 第五日　持地　不動明王に依て結界し其地を加持す今の敬合輪結界之に當る
- 第六日　攝護弟子　弟子を加持す今の三摩耶戒之に當る
- 第七日　灌頂　正しく灌頂を授く

右の如く七日を要する故に、三日以内に障難あれば築壇を停止し、四日以後ならば障難あるも停止せず、第三日以後は不動明王に依りて壇上を加持するのである、又第七日に至つて諸尊形を畫き諸供物を具備すべきなれども、間に合はぬ時は便宜に第五日より之を行ふも差支がない、尤も此七日作壇は大日經等に說く所なれば敎令輪を不動明王とすれども、金剛界の作壇ならば敎令輪は降三世明王である。

第六章　阿闍梨と弟子

第一節　阿闍梨

灌頂の阿闍梨となるには、十三種の德を具備すべきことが大日經に說いてある。

漫荼羅位、初阿闍梨、應發菩提心一妙慧慈悲二兼綜衆藝三善巧修行般若波羅蜜四通達三乘五善解眞言實義六知衆生心七信諸佛菩薩八得傳敎灌頂等一妙解漫荼羅畫九其性調柔離我執十於眞言行得決定十一究習瑜伽十二住勇猛菩提心十三秘密主、如是法則阿闍梨、諸佛菩薩之所稱讃

此等の十三德は阿闍梨としては是非具備せねばならぬのであるが、今は其兩三德すら具備せざる阿闍梨のあるのは實に痛恨の至である、古は阿闍梨の御老體なる時に手替をする人を置いたのが、即ち便壇阿闍梨である、開壇と云ふことは自ら灌頂壇を開設することである、此意味から云へば拙僧は開壇一度、便壇三度を勤めて居る、然るに今は開壇と便壇とを混じて何れを勤めても傳燈大阿闍梨と稱して居る。

第二節　弟子

弟子には結緣灌頂と傳法灌頂との二種がある、結緣灌頂に入るには固より何等の資格がない、惡人にても善人にても皆入ることを得るものである、故に金剛頂經には

入此大漫荼羅、是器非器不應簡擇、何以故、世尊或有有情作大罪者、彼入金剛界

大漫荼羅、見已入已、雖一切惡趣

とある、或所には無理に強制しても入れよとさへ書いてある、然るに傳法灌頂には誰でも入る譯には參らぬ、即ち弟子の資格を定めてある、即ち大日經に依れば入壇するには十德を具有すべきであるとして居る、其說には

若弟子信心一　生種姓淸淨二　恭敬於三寶三　深慧以嚴身四　堪忍無懈怠五
尸羅淨無缺六　忍辱七　不慳悋八　勇健九　堅行願十　如是應攝取　餘則無所觀

とある、即ち信心、善良種族、恭禮三寶、深智、精進、持戒、忍辱、施與、勇猛、悲願の十德あるものでなければならぬとして居る、次に一度曼荼羅壇を築いて灌頂する時の人數は、大日經には

或十或七八、　或五二一四、　當作於灌頂　若復數過此

とあるので、常には三六九を忌むとして居る、大日經疏には此三六九を忌むと云ふ譯を單に

如來密意、阿闍梨(若無畏三藏)不釋所由

として、何故なりやと云ふ說明はない、但し十人以上は阿闍梨の心量が及ふまいから、十人以下にする方がよいと記されてある、然るに今は十人以上も受者を引入するのは非法である、然るに瞿醯經には

應所受持弟子等數、或十或三或七乃至二十五雙、不得雙取、更不得已上

とある、然れば瞿醯經の意味は奇數でさへあれば二十五人までは引入しても差支ないとの說である、古來の阿闍梨は瞿醯經の說は用ゐずして、大日經の說のみ用ゐて居る。

第七章　金胎前後

現在醍醐流は初金後胎に灌頂し、廣澤流は初胎後金に灌頂して居る、是に就て古來重々の秘說が行はれて居るが、此の如き秘說を縷述するを止め、單に灌頂に就て一言を述ぶるに止めやう。

抑も弘法大師の惠果阿闍梨より傳授し給へる順序は六月胎藏界、七月金剛界、八月阿闍梨位と云ふのである、此阿闍梨位と云ふ時は金剛界なりや胎藏界なりやと云ふに是は兩部都法の阿闍梨となつた意味であるから、弘法大師灌頂の順序は初胎後金と見て差閊ない、而して其後の灌頂は如何に行はれたりやと云ふに、弘仁三年弘法大師か高雄山に行はれた結緣灌頂は十一月金剛界、十二月胎藏界の順に行はれて居る、即ち初金後胎の順序である、然れば金胎前後は機根に依て定まるもので、法に依て定まるものではない、併し弘法大師以後の實惠、眞雅の諸大德は金胎前後を何れにせしやと云ふに、是れ又記錄の明確のものはないが、其當時は今日の如く金胎を初夜後夜等に分つに行ふたものでない、機根に依て金剛界灌頂壇又は胎藏界の壇のみを建立し、而して印可は金剛界胎藏界共に授けたのである、故に初胎後金だの、初金後胎だのと云ふ區別はない、是れ延命院の元果が灌頂一夜式を書いた所以である、三寶院勝覺が此一夜式を初夜金剛界式後夜胎藏界式の二つに分つたのである、常に東密は壇は胎藏界に莊嚴して法は金剛界を修すると云ふことになつて居るが、此邊から推すと、初胎後金と行きたいのである、併し乍ら大日經と金剛頂經の說相から見れば前の第六章の入壇の資格に說いたやうに金剛頂經には入壇者を是器非器を擇ばずとあるのに、大日經は弟子は十德を具備したる優良者でなければならぬとしてある、又灌頂の儀則も金剛頂經よりは大日經が整ふて居る、此邊から見れば金剛界灌頂を先に行ふてもよいやうな氣もする、併し是は頗る淺略門の說である、後には廣澤流は一法界を表とするから

胎藏界を先に行し、醍醐流は多法界を表とするから金剛界を先に行するのであると云ふ深祕の説もあるが、寧ろ機根不同と云ふことが主であつたのが、後に流例となつたと見るのが適當であらう。

第八章　三摩耶戒

三摩耶戒は入壇灌頂の前方便である、大日經に依れば

持眞言行者　如是攝受已　命彼三白歸　命說悔先罪
奉塗香華等　供養諸聖尊　應授彼三世　無障礙智戒
次當授齒木　……　香華以莊嚴　端直順本末
東面或北面　嚼已而擲之　當知彼衆生　成器非器相
三結修多羅　次繫等持辟

とあるが根據である、大日經の意に依れば、灌頂の前日、三摩耶戒は懺悔して諸尊に香華を奉り、齒木を嚙みて之を投げて吉凶の相を知り、五色線を左の腕に懸けて信心を發さしめ、其夜に夢の吉凶を試し、翌日入壇以前に金剛誓水を飲むこととなつて居る、然るに今の三摩耶戒式は大日經の懺悔の意を酌みて、無畏三藏禪要の意に依りて、發心供養等の諸門を設け、終に齒木、金剛線、金剛誓水を授與することになつて居る、而して我眞言密敎は戒體は攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒の三聚淨戒を以て戒體となすから、此三摩耶戒は此意に依つたものである、故に古來金剛誓水、金剛線齒木を左の如く配當し居る。

三　戒　　三種菩提心　　三　部　　三摩耶戒
　　三種拜
攝律儀戒　　勝　義　　金剛部　　齒　木
攝善法戒　　三　摩　耶　　佛　部　　金剛誓水
饒益有情戒　　行　願　　蓮華部　　金剛線

此三摩耶戒は元來は晴の式ではないが、今では晴れの式として居つて、傳法灌頂の時は壁代中にて此式を行ふが結緣灌頂の時の三摩耶戒には壁代を掲げて全く晴れの式として之を行ふて居る。

第九章　灌頂作法

灌頂の作法に就ては、大日經、金剛頂經、略出經、瞿醯經、灌頂儀軌等に作法が委しく說いてある。是等は出入はあるが同しである、今の灌頂なるものは大日經を基として之に略出經等を添えて作つたものである、阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌の作者は廣澤流にては惠果阿闍梨の作と云ひ、小野流にては金剛智三藏の作と傳ふるが、此灌頂儀軌に至て灌頂作法は大に具備したものである、今參考の爲め、根本兩部の大經と及び廣澤流所用兩部灌頂式(遍照寺寛朝僧正の作)と……或は此式は廣澤及び勸修寺流にも用ゆる故に通用式とも云ふ……醍醐流所用の兩部灌頂式(三寶院勝覺作)の兩式との比較をして見よう。

灌頂作法

大日經	金剛頂經	廣澤式(金剛界)	醍醐式(金剛界)
灑水	四禮	五瓶移壇	五瓶移壇
	覆面	覆面	覆面
授三昧耶	授三昧耶	授三昧耶	授三昧耶
	引入	引入	引入
授花	誓水	香象	香象
投花	解三昧耶	授花	授花
	投花	投花	投花
		解覆面	解覆面
	取花	取花	取花
	解面	受者護身	受者護身
	視壇	四禮	四禮

瓶水加持　坐蓮臺　坐蓮臺
寶冠
辟釧
香花供養　讃
讃頌
登壇灌頂
香花供養
讃師

灌頂　弟子觀想
五瓶行道
灌頂

四佛加持
四佛繫髻
五佛灌頂
白拂

灌頂　寶冠頂
四佛加持
四佛繫髻
五佛灌頂
扇

塗香
五股杵

灌頂　四佛加持
四佛繫髻
五佛灌頂
白拂

塗香
五股杵

金剛名號　金剛名號
金篦　金篦
明鏡　明鏡
金輪　金輪
法螺　法螺
傘蓋行道　傘蓋行道
敬誠　香花供養
授杵　授杵
受者誓言
印明　印明

金剛名號
金篦
明鏡
法輪
螺

示三昧耶印明

となるのである、廣澤式には受者誓言が金剛界胎藏界共にあるが、醍醐式には後夜の胎藏界にのみ受者誓言があつて、初夜の金剛界にはない。

然り而して茲に一大注意を要することは、香花供養の置き所である、醍醐式にては傳法灌頂を上轉從因至果の灌頂と見るが故に五智瓶水の灌頂終り祕密道具も皆授けて

後に、新阿闍梨を佛として前阿闍梨より供養を捧ぐるものなれども、廣澤式は傳法灌頂を下轉の從果向因と見るが故に、香花供養は五智瓶水の灌頂以前に置いてある、而して傳法灌頂は他受用身の成佛なれば、始め香象を越ゆる時は即ち金剛薩埵の位にして夫より覆面を取る時までが十六大菩薩生の位である、然れば灌頂頓は語成佛の法門なりと云ふべきである。

第十章　授與物

第一節　印信

印信とは灌頂を受けた印として授與するものにて、此中には

祕印　血脈　紹文

との三種である、此は經軌には其說がない、昔は口傳相承にて、灌頂した印には袈裟五股杵等を印として授與したのであるが、後に灌頂を正に授けたに相違ないと云ふ書付を渡した是が即ち紹文である、之に祕印を書いたものを添え、又は血脈を添附した、蓮華臺寺寛空が康保二年に曼荼羅寺元杲に傳法灌頂した時は、紹文のみで血脈や祕印の添附がなかつたと云へば、血脈や祕印の添附は其後の事とも思はれる、故に流々に依て三種双ひて渡すものもあれば祕印と血脈の二種を渡すもの、又は紹文と祕印との二種を渡すもの、又は祕印のみ渡すものもある。

第二節　投花

投花は行者の有緣の佛に墮ちるのである、弘法大師は大日如來に墮ちたから遍照金剛と稱し、不空三藏は不空成就如來に墮ちたから不空と名けたのである、故に若し投花が外金剛部院に墮ちたならば、其人は祕密灌頂は受けられぬ筈である、故に今は灌頂の敷曼荼羅には阿闍梨の善巧方便で外金剛部は除いてある、投花は眞言行者が一生

の運定めだから、實に大切のことである、依て大日經疏の委しき說明を引證しやう。

師當爲彼結作三昧耶印、三遍誦彼眞言、置花印上、令弟子以至誠心向道場散之隨花所至之處、當知即是行人往昔因緣法門善知識、即依此方便門進趣修行也……

……凡阿闍梨、當觀花所至處辨其性類、若墮佛首、上成就佛頂及豪相等、墮面上應成就佛眼、在身中分當知成就諸心、若墮下分成就諸使者等、又隨佛身上中下分知上中下成就、蓮華金剛亦然、自餘諸尊但知上中下之相、若花墮去彼尊、遠者久遠方乃成就、若墮供養院隨所屬之尊授彼眞言、若墮兩尊間當觀其遠近、若先墮內院即移出外院者彼人信心不具、若强持誦、得下成就、墮諸界道及行道院者彼人無決定心、不獲成就、若彼欲更擲者應爲作護摩然後擲之、

とある、阿闍梨の口傳に三度までは投花を仕返してもよいとのことである。

第三節　金剛誓水

金剛誓水は呑んで佛と誓を結ぶのであるが、此金剛誓水を呑んだ土器を受者に渡すのである、之を今は入春日と稱して居る、大日經疏の說に依れば

又於別器、調和香水、以鬱金龍腦旃檀等種々妙香、亦以眞言加持、授與令飲少許、此名金剛水、以祕密加持故、乃至地獄重障皆悉除滅、內外俱淨、堪爲法器也、阿闍梨言、此即名爲誓水、亦順世諦猶如盟誓之法、令於一切衆聖前、哺此香水自誓其心、要令不退大菩提願也、

とある。

第四節　金剛線

金剛線と云ふのは五色線である、此五色は即ち五如來の色であるから、此金剛線は即ち五如來の結晶である、大日經疏には

次當作金剛線法、凡作綖當擇五好切具縷、香水洗之、極令淸淨、令潔淨童女右合之

合五色縷、當用五如來眞言各持一色、然後以成辨諸事眞言(不動)總加持之、造曼茶羅亦爾、五如來色者、謂大日佛加持白色、寶幢持赤色、華開敷持黃色、無量壽持綠色、鼓音佛持黑色、阿闍梨先自取縷之結、作金剛結用繫左臂護持自身、次一一爲諸弟子繫臂、如是攝受弟子、則入曼茶羅、是離諸障難也、其金剛結法、不可縷說、當從阿闍梨面授之、復次五色縷者、卽是如來五智、亦是信進念定慧五法、以此五法貫攝一切教門、是故名爲修多羅。

とある、金剛線の結び方は阿闍梨の口傳に依るものであるが、今は各流種々に結んで居る、又此根本經說から見れば金剛線は絹糸に限ると云ふ理由はない。

第五節　齒　木

齒木は煩惱を嚙み碎きて菩提を證せしめんが爲めに用ゐるものにて、是れ又印度の習俗より來りたるものである、大日經疏の說に依らば

次當授與齒木、令諸弟子嚼之、因卽觀彼人成器及非成器相、所以爲此法者、亦是順彼方俗諦、因用秘密方便而作加持也、印度國人、凡請僧食、乃至世人、相命皆先遺其齒木、以種々香華嚴飾而授與之、當知明日淸彼飯食也……今阿闍梨亦爾、授弟子揚技時、卽當寄此方便、爲說深法、……明日當貽汝不死甘露、皆令充足也、彼當取優曇鉢羅或阿說他木、端直備好者、必麁不細、劑十二指量……皆以枝末爲上、根板爲下、以香水灌洗、又復塗而熏之、於其下末、以白線纏華用爲莊嚴、亦作標誌、令上下易知、故當以手案則、不動眞言加之、或百遍或千遍、素令嚴備、旣受戒已、師當取一齒木奉獻諸尊、餘者分授弟子、令出壇外、向東或向北、如法蹲踞嚼之、嚼已、令向所面之方、而正擲之、而繪其相、若嚼處向外者是人悉地不成、向身者悉地成就、若遠擲却來近身是不久成就相、若首直竪向上成就更速、首向下者是人當入修羅龍宮、若擲在空中當知此人先已成就也、又向北方東方爲上成就、西方爲中成就、南方爲下成就、雖如是、若人先向東擲之而嚼處向東卽是背身亦不得成就、餘准此方類而可知

とある、齒木を嚼みて後に、荒莚に立つるは、「首直く堅つて上に向ふは成就すること更に速なり」と云ふ最吉相を顯したものである。

第十一章　結緣灌頂の作法

以上說き來つたので、灌頂の大略は之を諒解せられたであらう、玆に於て結緣灌頂の廣式と略式換言すれば受明灌頂作法と結緣灌頂作法を紹介しやう、此作法には幾種もあるが、此法で拙僧は寶仙寺で行ふて見たが、大に我意を得たものがあつた。

第一節　廣式受明灌頂作法

第一、三昧戒壇

先受者着座

次阿闍梨及證明師着座

次　惣禮　受者

次　驚覺鈴　阿闍梨

次　讃歌　讃衆

次　乞戒　受者總代

次　佛名　阿闍梨

次　說戒　阿闍梨

次　齒木授與

次　金剛線授與

次　金剛誓水授與

次　讃歌　讃衆

次　阿闍梨退座

授與物

次受者退座

第二正灌頂

一、引入法

先門前瓶加持

次塗香

次含香

次覆面

次引入

次香衆

二、壇前作法

先授花

次投花

次呼得佛名

次脫覆面

次曼荼羅禮

又傘蓋行道

三、初催作法

先寶冠

次瓶水灌頂

次明鏡

取受者普賢三昧耶印

四、後催作法

先授五股杵

次得佛印川印可

以上

第二節　略式結緣灌頂作法

一、受者引入

先門前瓶加持

次含香

次塗香

次覆面

次引入

次香象

二、壇前作法

先授花

次投花

■呼得佛名

次脫覆面

次曼荼羅禮

三、印可作法

先瓶水灌頂　取受者普賢三昧耶印

次授五股杵

次印可

以上

第十二章　灌頂の功德

灌頂の功德を說ひた經說を引證すれば、實に無量無數にある、依て根本兩部大經の

みに就て引證し餘は略することゝする、先大日經を檢すれば

一切智慧者　出現於世間　如彼優曇華　時々乃一現
眞言所行道　倍復甚難遇　無量俱胝劫　所作衆罪業
見此曼荼羅　消滅盡無餘　何況無量稱　住眞言行法

とある、「見此曼荼羅」の句を古來遙見曼荼羅即ち曼荼羅供の功德の說相として居るが其下に「何況無量稱、住眞言行法」とは、灌頂の功德の甚深廣大なるが思へやらるるのである、次に金剛頂經を檢すれば

世尊、或有有情作大罪者、彼入此金剛界大曼荼羅、見己入己、離一切惡趣、世尊、或有有情諸利飯食貪欲染着、增惡三昧耶爲先行等、如是等類、隨意愛樂、入己則得滿一切意願、世尊、或有有情、愛樂歌舞嬉戲飯食翫具、由不曉悟一切如來大乘現證法性故、入徐天族曼荼羅、於滿一切意願授受無上、能生愛樂歡喜、一切如來曼荼羅禁戒怖畏不入、爲彼入惡趣壇路門、應入此金剛界大曼荼羅、爲令一切適說最勝悉地安樂悅意受用、故、能轉一切惡趣現前道、故、世尊、復有住正法有情、爲一切衆生、求一切如來戒定慧最勝悉地方便佛菩提、故、久修禪禪定解脫地等勞倦、彼等入此金剛界大曼荼羅、儉入己、一切如來果尙不離、何況餘餘地類。

とある。實に廣大甚深の功德である、天臺宗の慈覺大師は、顯敎では即身成佛々々々と云ふが、其即身成佛の儀則を說いたものはない、然るに密敎には即身成佛の儀式が整然として具備して居ると仰せられた、此即身成佛の儀式と云ふのは即ち此灌頂の儀式である、然らば佛敎八萬四千の法門ありと雖も、此灌頂の儀式ほど尊い儀式はないのである、故に一たび此灌頂に入るものは今までの無量罪過は卽ち無量の功德となるのである、其事を切實に說いたのは、即身成佛義の言である、其文に曰く。

若凡若聖　得灌頂者　手結塔印　口誦鑁明　我觀大日
無疑惑者　現在生間、　頓斷無明　及五逆罪　四重八重
七逆越誓　謗方等經　一闡提等　無量重罪　皆悉斷滅

無有小罪　即身成佛　永離生死　常利樂衆　無有間斷
十方如來　常隨加護　三世諸佛　皆與授記　設造衆罪
悉成善行　沒無智觀　現證佛果　凡諸所有　舉手動足
皆成密印　開口發聲　悉是眞言　所有心念　自成定慧
萬德自嚴　若結一遍　即成常結　一切諸印　若誦一遍
亦過恒沙　無量眞言　若觀一念　足勝三世　入無量定
修習妙觀

とある、即ち一たび灌頂を受けたるものは、如何なる罪過でも、其罪過は即ち本來の功德相となりて光明赫灼たるものとなるとの意である、是は煩惱を過患斷とせずして功德斷とするからである、過患斷とは煩惱を滅して菩提を得るのであるが、功德斷とは煩惱其儘か即ち菩提であるとするのである、例を以て之を云へば過患斷と云ふのは養子を貰ふたやうなもので、先の實の親の家を出て、それから後に養家に入り茲に始めて養父養子と云ふことになり、其家を相續するか如きものである、然るに功德斷と云ふのは、親子が不遇にして生れた時から別れ〳〵になつて居つた所か或る機會で偶然面會して後に名乘り會ふたやうなものである、即ち此場合は親だ子だと云ふことが解つた瞬間が即ち親子となるので、前の家を出て後の家に入るが如き間隔がない、即ち煩惱が即ち菩提なりと覺つた瞬間が取りも直さず成佛の時である、故に菩提心論には

若人求佛慧　通達菩提心　父母所生身　速證大覺位

と、此消息を的確に道破して居る、實に尊い、難有いは、我秘密眞言最上乘の敎である。

灌頂講話 終

大正九年四月十八日印刷
大正九年四月廿二日發行

定價三拾錢

編輯人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　豐山派宗務所教學部
右代表者　湯澤龍岳

發行人　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　市橋本賢

印刷人　東京市神田區表神保町一番地　安田德治郎

印刷所　東京市神田區表神保町一番地　健捷堂印刷所

發行所　東京市小石川區大塚坂下町十七番地　新興社

振替東京四五八〇三番

890
28

終